



愛知医科大学看護学部

父母会会報

2026

第49号

発行日
2026年3月1日



令和7年度キャンドルセレモニー(宣誓式) 2学年次生
たちばなホール

CONTENTS

キャンドルセレモニー(宣誓式).....1	進路懇談会に出席して.....5
臨地実習の報告.....3	会員日より.....5

- 父母会会報へのご意見・ご要望をお寄せください。
- 父母会役員を募集しています。
詳細は父母会事務局までお問い合わせください。
TEL0561-61-1834 平日10:00~15:00

令和7年度 キャンドルセレモニー (宣誓式)



令和7年6月14日(土)、私たち25期生によるキャンドルセレモニー(宣誓式)が実施されました。今年も昨年と同様、保護者やご来賓の方々にご出席いただくことができました。

キャンドルセレモニーを開催するにあたり、企画や日程など慌ただしく準備を行わなければならなかった中、ご協力してくださった教職員、関係者の皆様はこの場をお借りして改めてお礼申し上げます。多くの方々に見守られ、私たちも緊張感をより一層感じ、身の引き締まる思いでキャンドルセレモニーに臨むことができました。

令和4年度入学生から開始された新課程のもとで私たち実行委員6名はキャンドルセレモニーに向けて準備を進めました。新カリキュラムは毎日のように講義や演習があり、その中で両立をして準備を行うことに苦労しました。また、私たち25期生は130名と人数が多く練習や意見をまとめることにも難しさを感じました。しかし、私たち実行委員は自覚と責任を持ち協力し合い準備をすることができました。そして多くの不安や苦労もありましたがリハールや本番を迎えることができました。また実行委員での活動は学校生活での大切な思い出となりました。

本番では、25期生130名も同様、どのような看護師・保健師・助産師になりたいのかを言葉にし、自分自身の夢や理想の将来の姿を改めて認識することができました。

看護の道を歩み始めたばかりの私たちですが、それぞれがキャンドルセレモニーで誓った言葉を胸に様々な方々の気持ちに寄り添い、信頼される看護職者を目指します。

日頃からの温かいご支援に感謝申し上げます。これからも温かいご支援を下さいますようよろしくお願い申し上げます。

キャンドルセレモニー実行委員会
委員 熊谷 天斗(2学年次生)



誓いの言葉

看護とは
さまざまな状況において臨機応変に対応し、患者さんの尊厳を守りながら健康や回復を支援すること

私たちは他学年に比べて人数が多いことで、多様な価値観に触れ、患者さん一人ひとりに、より柔軟で適切なケアを考えられる環境で学びを深め合うことができます
また、日々の講義や演習、実習を通して多くの仲間と共に学び、看護が社会に果たす役割の重要性を感じています

私たちは看護職者として、以下のことをここに誓います
患者さんの身体面だけでなく、精神面や社会面にも配慮し、それぞれの価値観に合った支援を行い、苦痛を和らげることができる看護を目指します
必要な援助を冷静に判断し、正しい知識と技術を持って、より良い看護を提供します
命を預かる医療従事者として、自覚と責任を持ち、誠実に行動します
多様な価値観を理解し、協力し合いながら、チームとしてより良い看護を提供します
医療の進歩に伴い、常に主体的に学び、成長し続けることで、社会に貢献できる看護師を目指します
私たちはこの誓いを胸に、看護師としての夢や目標に向かって学び続けます

令和7年6月14日
第二十五期生一同

臨地実習の報告

■ コミュニティ実習 ガーデンカフェやっちゃんち

2学年次生 中桐 花菜

コミュニティ実習では、一人暮らしの高齢者や障害のある方が、住み慣れた地域で生活を続けるためのヘルスプロモーション活動について学びました。私が実習させていただいたガーデンカフェやっちゃんちは、地域の高齢者が気軽に集まれる場となっていました。やっちゃんちでの交流によって、孤立が予防され、健康情報の共有や生活リズムの安定にもつながっていました。やっちゃんちでの交流が活力となり、地域住民の健康を支えていることを学びました。また、ストレッチやネイル、折り紙など複数のサロンが実施されており、住民が好きな活動を選択して参加できるようになっていました。ニーズにあった活動を行うことで、地域住民の主体的な参加につながるのだと学びました。

やっちゃんちの店主はダウン症のある方で、障害のある方の地域参加についても直接見学することができました。店主がゆっくりコーヒーを入れる姿が、利用者に穏やかさと優しさを与えているのだと感じました。また、店主の母親は元看護師で、やっちゃんちに来るお客さんの健康相談を受けており、地域の健康を見守っていました。脳梗塞を早期に発見した話も伺い、医療の知識のある看護職が地域の活動に参加することの意義を感じました。

実習を通して、対象者のニーズを捉え、参加したくなるような活動を作ることが、主体的な行動変容につながると学びました。今後は、地域で暮らす人々の生活に目を向け、地域住民の力を引き出すような支援を考えていきたいです。

■ 老年看護学実習 愛知医科大学メディカルセンター (北3階 整形外科病棟)

2学年次生 片岡 穂佳

老年看護学実習では、その人らしい生活を取り戻すための支援として患者にとって入院生活が出来るだけ充実出来るものとなり退院後を見据えられるような心理的サポートや、もてる力を活かした支援が看護の役割であることを学びました。

老年期における患者に対しては疾患と加齢変化の両方から情報を収集することが必要であり、患者を病気の人ではなく生活者として理解するためには対象者のことを決めつけずに知ろうとする姿勢が内側の思いを引き出すことに繋がり、身体的・心理的・社会的側面や人生経験や価値観など総合的に情報収集することで全人的な理解に繋がるという新たな部分に気づくことが出来ました。患者の出来ない部分を支えるだけでなく、出来る部分を活かして伸ばすといった視点を持つことで自己効力感を高め健康維持やQOL向上に繋がることも学びました。本人の性格を理解して意思や意欲やペースを尊重した自尊心を傷つけない関わりにより、もてる力を引き出し活かすことが出来ると学んだ。出来ないことに着目しがちですが、勝手に「理解していない」「出来ない」と決めつけずに本人の価値観や培ってきた経験を尊重し興味があることから意欲を引き出すといった強みに着目することが加齢変化に応じた看護で重要であり、本人の最大限の力を発揮させて退院後の生活に繋げていけるのだと学びました。

今回の学びを活かして患者さんの個性を意識した看護について今後も考えていきたいです。

■ 成人看護学実習Ⅰ(急性期) 愛知医科大学病院 (9B病棟：消化器外科)

3学年次生 大江 柚夏

成人看護学実習Ⅰ(急性期)では、手術を受ける患者さんに対し、術前の準備段階から術後の急性期、さらに退院後の生活を見据えたセルフケア支援まで、連続した看護の重要性を学びました。術前には、患者さんが安全に手術へ臨めるよう全身状態を把握するとともに、身体的側面だけでなく、手術に対する不安や恐怖といった心理面にも配慮した関わりが求められることを学びました。

術後の急性期では、患者さんの状態が刻々と変化する中で、合併症を早期に発見し重症化を防ぐ看護の重要性を理解しました。そのためには、患者さんの変化を的確に捉え、適切なアセスメントと対応につなげることが不可欠です。また、患者さん自身が自らの状態を理解し、異常時に伝えられるよう支援することも、早期発見を支える看護の一つであると学びました。

急性期看護では、迅速な判断と行動が求められる一方で、患者さんの療養生活は入院中に限られず、退院後も継続していきます。そのため、個々の理解度や生活背景に応じたセルフケア支援を行い、将来の生活を見据えた看護を提供する視点が重要であると考えました。さらに、病棟看護師や手術室看護師をはじめ、医師、薬剤師、栄養士など多職種と連携するチーム医療の中で、看護師が患者さんの全体像を捉え、ケアをつなぐ役割を担っていることを学びました。今後は、変化の激しい急性期においても患者さん一人ひとりに向き合い、先を見据えた看護を実践できる看護師を目指していきたいと考えています。

■ 精神看護学実習Ⅱ 杉田病院

3学年次生 若林 瑚々夏

精神看護学実習では、私は精神疾患を持つ方の生きにくさや希望について理解し、その人らしく生きるために必要な看護とは何かを深く考える機会となりました。

病棟実習では、統合失調症をもつ患者さんを受け持ち、初めはボソボソと話され、妄想も激しく支離滅裂な中で、どう関わればよいのか戸惑いを感じていました。しかし、焦らず相手のペースを尊重し、反応を丁寧を受け止めたり、沈黙を大切にそっとそばにいたりしたことで、少しずつ心の距離が縮まり、患者さんから短くても言葉が返ってくるようになりました。この経験を通して、非言語的なやりとりや患者さん一人ひとりのペースや世界を尊重する姿勢が求められることを学びました。そして直接的なケアや処置だけでなく、「そばにいる」「話を聴く」といった心に寄り添う関わりそのものが看護であり、その関わりが患者の安心や信頼につながるということを知りました。

また病識の欠如や判断能力の低下により、患者さんの意思尊重に関して倫理的な問題に直面する場面も多くあることを知りました。そのため最善の支援を考えるためにも、その背景にある不安や苦しみを理解し、安心して話せる環境や看護師が受け入れてくれる存在になるという信頼関係が必要不可欠になると学びました。

今回の実習を通して、患者さんに一人一人向き合いながら、その行動の背景にある思いや状況を多角的に捉えて今どんなことが必要か、希望や生きにくさに着目した看護を実施していきたいです。

■ 統合看護実習(公衆衛生) 瀬戸市福祉保健センターやすらぎ会館

4学年次生 齋藤 瑞季

統合看護実習では、保健センターで母子と関わり、地域で暮らす妊娠期から育児期の母親はどのような不安や悩み、困りごとを抱えているのか、またそれに対して看護職はどのように切れ目ない支援を実践しているのかを学ぶことができました。

特に実習の中で、看護職が母親の様々な気持ちを肯定的に捉えながら寄り添った関わりをすることで、母親自身が看護職と一緒に育児を支えてくれる相談役として認識してもらえるように伴走する看護職の姿勢が印象的でした。対象の気持ちに耳を傾けて寄り添っていくことは、母親の中で育児の悩みを自己解決に向けてことや育児に関して整理することを可能にするため、対象に応じて話の引き出し方や話しやすい雰囲気、言葉使いなどコミュニケーションスキルを工夫して関わっていくことも関係構築において重要な要素であると改めて学ぶことができました。

また、看護職として対象の自己効力感や、セルフケア能力を向上できるような関わりをすることの重要性も学びました。看護職は母親の出来ていることや頑張り、ストレングスに着目し、肯定的にフィードバックすることで、精神的な負担を軽減し、安心感を与え、自己効力感を高められるような関わりがされていました。母親によって様々な背景や思いがあるからこそ短い時間の関わりで、対象の顕在的な側面だけでなく潜在的な側面を含め全人的に対象を捉え、その人に応じた声かけや支援をしていくことが大切だと改めて学ぶことができました。

今回の対象は母子でしたが、統合看護実習で学んだ地域の視点を大切に、多職種で連携・協働しながら病院で入院される患者さんが地域で安心して暮らしていけるように看護を提供していきたいです。

■ 統合看護学実習

愛知医科大学病院

(10A病棟・糖尿病内科・内分泌内科・消化器内科・呼吸器アレルギー内科)

4学年次生 杉浦 夢唯

統合看護学実習では、慢性疾患を持ち、医療や生活面で継続的な支援を必要とする患者さんと関わる中で、セルフマネジメント支援の難しさと奥深さを改めて学びました。

セルフマネジメント支援において、「必要だから勤める」というだけではセルフマネジメント能力の獲得には繋がりません。実践を通し、患者さんが抱える不安や価値観、納得できない理由を丁寧に受け止め、その方にとって意味を持つ活動や無理なく続けられる方法を一緒に探していく姿勢が重要であると実感しました。看護師が意図する目標に誘導するのではなく、患者さん自身が「これならやってみよう」と思える支援を作り出すことが、セルフマネジメント支援の核心なのだと考えます。また、看護師が「医療から生活への移行」を調整する役割を担っていることを強く意識しました。退院後の暮らしまで見据えた支援の必要性は、今後の看護実践でも大切にしていきたい視点です。

4年間を振り返ると、実習や学びの一つひとつの場面で自分の課題が明らかになり、それと向き合う経験が確実に自分を成長させてきたと感じます。知識不足を痛感したこと、患者さんとの関わりに迷ったこと、指導者の方からいただいた言葉に支えられたことなど、多くの経験が現在の自分を形づくっています。患者さんの表情や言葉、指導してくださった方々の助言はどれも大切な学びであり、心の支えとなっています。これまで関わってくださったすべての方への感謝を胸に、学びを今後の糧として、看護師としてより良い看護を提供できるよう精進していきたいと考えています。

進路懇談会に出席して

3学年次生 田中 麗那

令和7年12月23日(火)に、進路懇談会が行われました。はじめに行われた履歴書ブラッシュアップ講座では、志望動機や自己PRの考え方、記入時に注意すべきポイントについて詳しく学ぶことができました。事前に作成してきた履歴書のチェックリストを用いて確認することで、自分に不足している点や、改善すべき表現が明確になり、今後どのように修正していけばよいのかを具体的に把握することができました。自分の現状を客観的に見直す貴重な機会となり、今後の就職活動に向けた課題を整理することができました。

その後の卒業生による進路相談では、大学病院だけでなく他病院へ就職した先輩のお話も伺うことができました。少人数で落ち着いた雰囲気だったため、他病院への進路を決定した理由や実際に働いて感じた良い点、大変な点についても詳しく聞くことができました。また、現在私自身が就職先を決める上で不安に感じていることについて、具体的に質問して相談することができ、働く姿をより現実的にイメージすることができました。

今回の進路懇談会を通して、就職活動に対する意識が高まり、進路についてより真剣に考えるきっかけとなりました。また、自分の生活スタイルや目指す看護師像に合った就職先を選ぶことの大切さを改めて学びました。今後は病院説明会などに積極的に参加し、自分に合った進路を見極めたいと、採用試験に臨んでいきたいと思えます。

会員だより

4学年次父母 伊井 典子

看護師になると決めて入学したのはコロナ禍真っ只中でした。様々な制限がある中で自ら知恵を絞り行動するという姿は時に遅しく、時に嬉しく思いました。これも日々見守ってくださった先生方、そして学業や実習など共に学び、笑い、支えあいながら過ごした仲間のおかげだと思っております。4月からは今までとは違う環境で日々変化する状況に合わせながら臨床に立ちます。順調にいく事もあれば壁にぶつかる事もあるでしょう。

しかし、壁の前で立ち止まってしまったとしても大学で培った精神、技術、そして共に歩んだ先生方と仲間たちの日々が糧となって必ず次の一歩となってくれることでしょう。

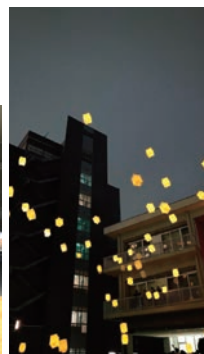
みなさんの次のステージに大きな声援を送りたいと思えます。

医大祭2025

2025年11月1日(土)、2日(日)、第50回医大祭が開催されました。

今年は第50回という特別な節目を迎える医大祭の開催となりました。

医大祭のテーマは「50ing」でした。50周年の「50」と、前に進むという「going」を組み合わせています。これからも医大祭、そして愛知医科大学が進み続けてほしい…という願いが込められています。



学業生活等に関する相談窓口について

大学生活のさまざまな悩みごとについては、アドバイザー（看護学部教員）が相談に応じています。アドバイザーがご不明の場合等は、看護学部学生支援課までお問い合わせください。（学生便覧76.77項参照）

編集後記

副会長
編集責任者：戸塚 悦子

日頃は父母会活動にご支援・ご協力いただき、心より感謝申し上げます。

お子様方は、学年ごとに異なる学びの中で、悩み、迷い、感動を経験されていることでしょう。そして、保護者の皆様もハラハラドキドキしながら温かく見守ってらっしゃると思います。

父母会は、学生の皆さんが安心して学生生活を送れるよう、大学と連携し、共に課題を解決しながら成長をサポートする体制を整えてまいります。ご意見・ご要望がございましたら、どうぞお気軽にお寄せください。

今後とも父母会活動にご理解ご協力のほど、よろしくお願い申し上げます。

愛知医科大学看護学部 父母会会報 第49号

発行日 2026年3月1日
発行 愛知医科大学看護学部父母会
発行人 田上 寛
編集人 戸塚 悦子
連絡先 〒480-1195
愛知県長久手市岩作雁又1番地1
愛知医科大学看護学部父母会事務局
TEL (0561) 62-3311 (内線12045)
FAX (0561) 61-1834
E-mail: fubokai@aichi-med-u.ac.jp